



〇〇中学校 第1学年

社 会 科 通 信

な ん で や ね ん

発行責任者 倉橋 忠



No.24-2

縄文時代 前期から中期の暮らし

さんないまるやまい せき
三内丸山遺跡

復元した大型掘立柱建物

青森県の三内丸山遺跡は、今から約5,500年前～4,000年前の縄文時代前期から中期の集落跡で、長期間にわたって定住生活が営まれていたことが分かっている¹。

三内丸山遺跡では、^{たてあなじゅうきょ}掘立柱建物跡、大型掘立柱建物跡、^{もりど}大人の墓、^{ほったてばしら}子どもの墓、^{ちようぞうけつ}盛土、^{ねんど}掘立柱建物跡、大型掘立柱建物跡、貯蔵穴、粘土採掘坑、ごみ捨て場、道路跡などが見つかっている。さらに、膨大な量の縄文土器、石器、土偶、土・石の装身具、木器（掘り棒、袋状編み物、編布²、漆器など）、骨角器、他の地域から運ばれたと考えられるヒスイや黒曜石なども出土している。

ヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培植物が出土し、DNA分析によってクリの栽培が明らかになるなど、数多くの発見があり、それまでの縄文文化のイメージを大きく変えた遺跡である。

はったてばしら 大型掘立柱建物跡

地面に穴を掘り柱を立てて造った大型建物跡である。^{はしらあな}柱穴は直径約2m、深さ約2m、間隔が4.2m、中に直径約1mのクリの木柱があった。地下水が豊富なことと木柱の周囲と底を焦がしていたため、腐らずに残っていた。6本柱で長方形の大型高床建物と考えられる。



残存していた大型掘立柱建物の柱

大型住居跡

長さが10m以上の物を大型住居跡と言う。三内丸山遺跡では最大の物で長さ約32m、幅約10mの物が発見されている。集落の中央付近から見つかることが多い。何に使われたのかは分からない。集会所、共同作業所、共同住宅などの説がある。



復元された大型掘立柱住居

*1 「なんでやねん No.24-2」の写真は、特に断らない限り「特別史跡 三内丸山遺跡公式ホームページ」のものを使った。説明文も、同ホームページの記事を主として参考にした。

*2 あんぎん(編布)は、「日本最古の布として縄文時代にわが国で開発された特殊なものである。」尾関清子『縄文の衣 - 日本最古の布を復原 -』学生社 1996年 p.89。

たてあなじゅうきよあと 竪穴住居跡

縄文時代の住居は地面を掘り込んで床を造った。三内丸山遺跡のものには、中央に炉がある。なお、住居の平面形や柱の配置、炉の位置や構造は時代によって変化がある。



はったてばしらたてものあと 掘立柱建物跡

地面に柱穴を掘り、柱を建てて屋根を支えたものと考えられる。集落の中央、南盛り土西側などから密集して見つかった。これまでの考古学では掘立柱建物は、弥生時代以降に登場すると考えられていたことをくつがえす発見になった。



はか 墓 大人と子どもの墓は違う所につくられた

① どこうぼ 土坑墓

大人は、地面に掘られた円形や楕円形の穴に埋葬された。大人の墓は集落東側の道路に沿って、両側に2列に配置されていた。

② まいせつどき 埋設土器

子どもは亡くなると、丸い穴を開けたり、口や底を打ち欠いた土器(埋設土器)の中に入れられ、住居の近くに埋葬された。土器の中から握り拳大の丸い石が出土する場合が多く、当時の習慣に関係するものと考えられている。



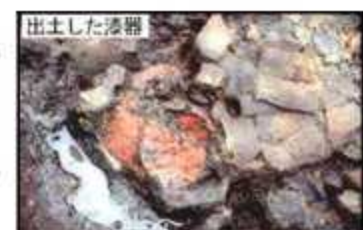
道路跡 (くぼんでいる所が道路跡)

三内丸山遺跡では、道路が集落の中心から幅約12m、長さ420mにわたって、海に向かって延びていることが発見された。道路は地面を少し掘り下げて、浅い溝のようになっているものや、さらに土を貼って「舗装」されているものもある。最近の調査で、南北にのびる道路も見つかっている。



谷(ゴミ捨て場)

谷はゴミ捨て場として使われていた。谷は水分が多く空気から遮られていたので、土器・石器の他に、通常では残らない木製品や漆器、動物や魚の骨、うろこ、植物の種子、木の実、寄生虫卵などが良好な状態で残っていた。



三内丸山遺跡出土の「食べ物」

考古学では、ゴミ捨て場の遺物や、骨の分析から人々が食べた物を推定する。これまでの研究結果では、縄文人の食料の大部分は、木の実などの植物性の食料である。

三内丸山遺跡では、クリやクルミが大量に出土しており、クリは特に重要だったと考えられる。また、イモ類や山菜も利用されたほか、マメ類やヒョウタンなども栽培していたことが分かっている。

動物の骨では、普通の縄文遺跡ではシカやイノシシが多いが、三内丸山遺跡ではムササビやノウサギなどの小動物が多い。魚類ではマダイ・ブリ・サバ・ヒラメ・ニシン・サメ類が多く、フグも食べられていた。鯨やアシカの骨も発見されている。

鳥類も食べていた。鳥類ではガン・カモ類の骨が多く見つかった。

なお、調理方法は「焼く」よりも「煮る」が多かったと考えられている。

貯蔵穴

集落の外側、台地の縁近くからまどまって発掘された。入り口がせまく底が広い、断面がフラスコ状のものが多く、クリなどの木の実、食料をたくわえる施設だったと考えられる。中には深さが2m近くもある大型のものもある。



遠くの地方との交易

集落が大きくなる約5,000年前から遠くの地方と交流があった。三内丸山にはない、ヒスイ、黒曜石、琥珀、アスファルトなどが出土した。

ヒスイは、約600km離れた新潟県糸魚川周辺の物であった。原石、加工途中の未完成品、完成品の珠などが見つかった。非常に硬い石で、その加工には熟練した技術と知識が必要だった。

黒曜石は北海道十勝や白滝、秋田県男鹿、山形県月山、新潟県佐渡、長野県霧ヶ峰の物が出土した。



土偶

土偶も大量に発見されている。三内丸山遺跡の土偶は、十字形土偶で板状のものが大半で、壊されているものが多い。



骨角器（縫い針と釣り針）

骨角器では銚(もり)・釣り針・針

・錐(きり)³・ヘアピンなどが出土している。一番数が多いのは針で、長さ・太さ・針穴の大きさなどで様々な種類があり、用途に応じて使い分



けていたことがわかる。また、動物の肋骨を使用した針が多いのが三内丸山遺跡の特徴である。

木製品

木製品には用途が明確に分かるものは少ないが、土を掘るための掘り棒や漆塗りの容器・櫛などが見つかっている。漆器の他に、漆器製作に使用する用具やウルシの種子も出土しているので、この地で製作が行われたと考えられる。

また、小型のカゴも出土し、植物を材料にした容器類も豊富に使用していたことが分かる。

ヒノキ科の針葉樹の樹皮を素材として編んだ、小さな袋(「縄文ポシェット」と呼ばれる)が出土した。網代編みで作られている。完全な形のものは日本でこれだけである。



打製石器と磨製石器

クリやクルミなどをすりつぶす道具の石皿と磨石が発見されている。木の加工に使用



された磨製石斧も発見されている。また、黒曜石で作られた打製石器のナイフ、石匙(いしざじ)⁴、石鏃(石の矢尻)、槍の先に着ける尖頭器などが多数出土している。

土器

土器では、食べ物を煮るときに使用したものと、食べ物などを貯蔵するときに使用したものが多数出土している。

円筒形の土器で、深鉢型が多い。



³ 木の加工や、毛皮に穴を空けるときなどに使われた。様々な形と大きさの物がある。

⁴ ナイフ形石器の一種で肉を切る時に使用された。